

田園俳人松本椿年の生涯と作品（五）

——昭和三十年代から四十年代（前期高齢期・後期高齢期）のライフイベントと作品補足——

宮 川 充 司*

俳人松本椿年（うねん、本名松本傳次郎）は、明治二十年（一八八七）七月に静岡県駿東郡中嶋村（現在の静岡県駿東郡小山町中島）の旧家に生まれ、昭和六十一年（一九八六）二月に生涯を閉じた地方俳人である。十歳の頃から、俳句の宗匠でもあった父親から俳号と俳句の手ほどきを受け、その父親の没後から最晩年満九八歳で生涯を閉じる臨終ぎりぎりの所まで、ほぼ一世紀に亘る日本社会の激動期を、農村の中で生活に密着した句作とともに生きた俳人である。この俳人について、宮川（二〇一六）は、年譜の試作版を誕生から死に至るまでの個人史を判明している出来事から作成した。その手法として、単に俳人としての年譜を作成するのではなく、それを構成するために、もつと大きな俳人の生涯という枠組で、俳人の個人史を作成し、その中から後に俳人としての年譜を作成できるような方向での資料収集とライフイベント（生涯の出来事）の分類整理をするという、アプローチを採った。この俳人の作風は、単なる想像や言葉遊びの手法で俳句を作るのではなく、農作業の傍ら体験する自然の観察や生活の中で出会った出来事や感動を、そのまま作品とする

生活俳句が本領であり、また「習作期」と「投句休止期」と名付けた時代を除き、月刊を基本とするいくつかの俳句誌にほぼ毎号のよう投句を続けているので、俳句誌が現存しているものについては、作品の発表時期を特定することが可能と考えられた。

この俳人の作品については、宮川（二〇一七）はこの俳人の生涯を次の五つの時期に区分した。一、誕生から俳句の習作期（明治二十年から大正末期頃）、二、俳人としての出発と戦前の俳句誌への第一次投句期（昭和初期から昭和十五年頃まで）、三、俳句誌への投句休止期（昭和十六年頃から昭和二十二年頃）、四、俳句誌への第二次投句期『大富士』『みづうみ』投句期（昭和二十三年頃から昭和五十八年頃）、五、最晩年終焉期（昭和五十九年頃から昭和六十一年二月）とした。そのうちの投句休止期と名付けた昭和十六年頃から昭和二十二年頃までの時期を除いて、亡くなる直前まで句作を、また俳誌への投句は亡くなる前々年の昭和五十九年九月（九十七歳）頃まで続けた俳人である。

宮川（二〇一八）では、昭和初期から昭和三〇年代までの俳句作

品を分析し、それから推定構成したライフイベントから、その期間の個人史を作成した。

昭和初期の俳句作品として、加納野梅が主宰の俳誌『新草』の創刊号（昭和四年五月）から第四〇号（昭和七年八月号）までの掲載句から選句編集し、昭和七年（一九三二）に刊行した『新草俳句集』（国立国会図書館デジタルコレクションとして公開）に収録されている松本椿年三十四句のうち、作句の背景が読み解けなかったいくつかの昭和初期作品の推定解説を行った。主宰の加納野梅は、大正リベラリズムの中で登場したジャーナリスト出身の俳人としても知られていたので、他誌で扱われない作風の句も投句されていた。

昭和四年四月に椿年の母校静岡県駿東郡小山町成美尋常高等小学校に、渡辺水巴主宰の俳誌『曲水』の選者でもあった古見豆人（本名古見一夫）が校長として着任し、その推薦により、『曲水』の同人となった。椿年の『曲水』投句掲載は、第十四巻第十号（昭和四年七月号）から第二十巻第一号（昭和十年一月号）までであった。

古見豆人を中心に、幼なじみで富士紡績小山工場に勤めていた早間冬青子や坂本緑村らと、社外の俳人湯山素鷗や湯山逸素らを加えて、『あゆみ句会』が起こされた。

俳句の師古見豆人が昭和四年（一九二九）四月に静岡県駿東郡小山町で起こしたあゆみ吟社は、昭和六年一月には大富士吟社として発展し、月刊俳誌『大富士』の刊行へと発展した。また、豆人が昭和十三年（一九三八）四月に東京世田谷に転居したことにより、中央の主要な俳誌の一つとなっていた。一方で豆人師が起こした小山の句会には豆人が東京に転居すると共に、求心力を失い、次第に活動が衰退していった。心配した豆人が翌年小山町を再訪し、椿年宅を訪ねたのは昭和十四年（一九三九）二月八日。この時の心境を吟

じ直ちに『大富士』第九巻三号（昭和十四年四月号）に投句したのが、いかにも椿年らしい次の句である。

搾乳の手を離されず御慶受く

（『大富士』第九巻三号 昭和十四年四月号 三九頁『句集老稚』九頁）

新暦で二月といっても、旧暦では正月であった。新暦旧暦にこだわらずに吟ずることを、椿年に教授したのも豆人師であった。乳牛の乳搾りは、始めたら途中でやめられない。そんな作業の最中に、俳句の師である豆人が尋ねてきたが、大したものでないしできないうちにお帰りになってしまう。来訪の目的であった俳句活動の再開促進も、時勢からままならない。そんな複雑な思いを、豆人師の訪問直後に俳誌『大富士』に投句した作品であった。

この句は、『つばき句集』（二頁）にも、『塔創刊十周年合同句集星苑』（二六八頁）にも『句集 老稚』（二頁）にも収録されている。

この『大富士』への椿年の投句は、第二次世界大戦が始まり戦禍が拡大していく昭和十六年（一九四一）四月号を最後に中断され、昭和二十三年（一九四八）五月号第十八巻五号から昭和二十四年十月号第十九巻第十号まで一時再投稿が見られたが、本格的に復帰したのは昭和二十八年（一九五三）七月からであった。

この昭和初期から戦後に亘る椿年の投句活動の中心であった『大富士』の主宰古見豆人が昭和三十三年十一月二十二日に急逝した。また、豆人が主宰していた『大富士』は主宰の急逝により、第二十八巻第十一号（昭和三十三年十一月号）をもって廃刊となった。椿年が俳句誌の世界に復帰してから、わずか五年の歳月が流れたと

ころであつた。この間の椿年周辺に起こった様々な出来事は、昭和三十年代を中心に、宮川（二〇一八）で詳述した。その『大富士』の後継誌として、刊行されたのが小笠原龍人主宰の『塔』であつた。椿年はその年の内に、同人参加した。

古見豆人が逝去した翌年一月、古見一夫（豆人）が静岡県韭山町（現在の伊豆の国市）の韭山尋常高等小学校長をしていた時の教え子の一人で、門人であつた小笠原龍人が、『大富士』の後継誌として、俳誌『塔』を創刊し、塔俳句会を起こした（小笠原、一九七四）。俳誌『塔』は、椿年の遺品として松本家に残されている俳句誌に二号分が現存している。第十一巻第十一号（昭和四十四年十一月号）と第二十五巻第九号（昭和五十八年九月号）の二号であり、その俳誌への椿年の投句状況は判然としなかった。しかし、俳誌『塔』は、公益法人俳人協会が運営する俳句文学館に、初期の刊行巻号から、多くの巻号が収集所蔵されている。第一巻第十号（昭和三十四年十月号）の一号を除けば、比較的継続的に収集されているのは、第五巻第七号（昭和三十八年七月号）以降の巻号であり、しかもかなりの欠巻欠号がある。『塔』の所蔵館として、埼玉県立熊谷図書館埼玉資料室が、多くの巻号を所蔵しているが、第十巻第一号（昭和四十三年一月号）以降のものに限定され、しかも同様に、多くの欠号がある。この二館の所蔵する巻号から、椿年の投句状況を閲覧調査した。まず、俳句文学館所蔵の第一巻第十号を閲覧したところ、椿年の句は「水煙集 同人作品」に五句（二頁）、「塔俳句 小笠原龍人選」に四句（一三頁）掲載されていた。第一巻第十号に九句椿年の掲載があるところから、第一巻の何号からかは確認できないが、少なくとも十号からはかなり継続的に投句されていたことが推定できた。

椿年の『塔』への投句は最晩年の昭和五十九年一月号第二十六巻第一号（通巻三〇〇号）まで続き、最も継続的な投句期間が長い俳誌となつた。

なお、俳誌『塔』の欠号分を補完する刊行物として、塔俳句会の創刊十周年を記念した『塔創刊十周年記念合同句集 星苑』が昭和四十三年（一九六八）に出版されており、その二六八―二六九頁に、椿年の代表句が五十句掲載されている。これらの句はいずれも昭和四十五年（一九七〇）に刊行した椿年の処女句集『句集 老稚』に採録されている。その句集の選句の大きな基盤になつたものと考えられるが、半数の二十四句は過去の掲載誌の投句であることが特定できたが、残り半数は特定できないので、『塔』欠号分に掲載された句がこの刊行物のための新作句であるかのいずれかであろう。

『大富士』『塔』とともに、椿年が多くの作品を投句した俳誌は、原田濱人が主宰した『みづうみ』である。この俳誌ばかりは、昭和三十六年五月号（第二五六号）から昭和五十八年十一月号（第五二六号）までかなりの巻号が遺品として保存されている。ただし、この遺品も多くの欠号があり、それらの欠号について俳句文学館所蔵の閲覧調査を行ったが、それらの欠号補完分にも多くの椿年の掲載句がある。さて、その『みづうみ』についても、昭和五十八年十一月号までの閲覧収集作業を行った。

俳誌『みづうみ』への同人参加は、原田濱人の門人でもあつた湯山素鷗や湯山逸素らの奨めによるものと考えられるが、その同人参加の契機となつた出来事として、昭和三十五年十月の静岡県小山町と山梨県境にある笹坂峠の原田濱人句碑の除幕式があつた。この句碑建立の委員長は湯山逸素であり、椿年もこの除幕式に参加していたと推定できる。『みづうみ』第三三三号掲載の椿年本人が書き残

したエッセイ『私の雅号』（松本、一九六六）や、湯山逸素の句集『逸素句集』（湯山、一九六九）に掲載されている逸素の年譜からの推定である。椿年の『みづうみ』への投句は、第二五六号（昭和三十六年五月号）からであり、昭和三十六年一月からの同人参加であったと推定できる。また、『みづうみ』への投句は、昭和五十八年十一月の第五二六号（昭和五十八年十一月号の竿頭欄四句（四頁）で終結している。『塔』と並び、最晩年までのかなり長い期間にわたって投句された俳誌であることがわかる。これらの俳誌『塔』『みづうみ』二誌に投句された俳句作品から、宮川（二〇一八）は、椿年の昭和三十年代の作品とライフイベントを、宮川（二〇一九）では、昭和四十年代の作品から、ライフイベントを推定、個人史を作成した。

昭和三十年代は、昭和三十年（一九五五年）五月の妻すみとの死別から始まり、昭和三十三年（一九五八年）十一月の俳句の師古見豆人の急逝、昭和三十九年一月孫娘京子の婚姻、三月の俳人湯山素鷗の死、七月の椿年の喜寿の祝と慶弔様々な出来事で終わっている。

昭和四十年代は、昭和四十年三月の湯山素鷗の一周期追善句会、同年九月嗣子辰雄の病死という更に悲しい出来事で始まった。昭和四十九年三月、孫や曾孫に囲まれ、平穏な米寿の祝いまでの幸不幸様々な出来事に遭遇し、その度に夥しい作品生まれていった椿年後期高齢期の姿を俳句作品を通して描写した。

俳人としての松本椿年を色取る昭和四十年代の出来事は、昭和四十五年（一九七〇）『句集 老稚』の刊行である。この句集には、明治三十一年（一八九八）十歳頃から昭和四十四年（一九六九）頃までの大凡七十年間に亘る七百四十八句が収録されている。その句集の元になったものに、手書きの『つばき句集』と題した草稿本が

椿年の遺品として残されている。このことは、「田園俳人松本椿年の生涯と作品」に関する最初の論文（宮川、二〇一六）で報告した。この句集に掲載されている作品には、俳誌掲載句については発表年月で発表年代の特定できるものも含まれているが、俳誌の主立った所蔵館での欠巻欠号が少なくないため、俳誌での発表年代が特定できないために、未発表作品であるか否かは未だ特定できていない。現時点で、椿年が投句したと考えられる俳誌の所蔵巻号は調査収録完了といってもよい状況にあるため、現時点での基本資料から、椿年の三つの句集草稿本『つばき句集』、『句集 老稚』、昭和五十七年（一九八二）四月刊行の『第二句集 限界』掲載句の発表年代を特定する作業を行うことが可能である。その試みとして、選句執筆時期が未確定の草稿本『つばき句集』について、分析してみることとした。特にこの草稿本は、『句集 老稚』の母体となった未刊行句集または『句集 老稚』の草稿本としての検討が必要である。

『塔』昭和三十四年十一月号から昭和三十五年二月号までの未知の椿年俳句

俳誌『塔』をもっとも体系的に所蔵しているのが、日本俳句文学館であるが、なお欠巻欠号が多く、ある程度継続的に収集しているのは、第五巻第七号昭和三十八年七月号からである。欠巻欠号の一部は埼玉県立熊谷図書館所蔵のもので補うことができた。それでも第五巻第七号以前のもものは第一巻第十号（昭和三十四年十月号）のみであった。その号に椿年の句は「水煙集 同人作品」（二頁）の部に五句、「塔俳句 小笠原龍人選」（一三頁）に四句掲載されている。日本の古本屋というネットワークで、欠号を探して見たところ、

偶然創刊号を見つけ即購入した。ただし、小笠原龍人が余程急いで創刊したためか、大富士同人の句は少なく、椿年や周辺の俳人の掲載句はなかった（宮川、二〇一七）。この創刊号は、現在は日本俳句文学館に寄贈し、同館所蔵となっている。こうした欠号の補完に、古書店のネットワークからの探索購入は一つの有力手段と考えているが、丁度前稿を書き終えた頃、日本俳句文学館の欠号となっている第一巻十一号（昭和三十四年十一月号）と第二巻第二号（昭和三十五年三月号）の継続した四号分が売りに出ているのを発見し直ちに購入した。このわずかに四号分の欠号入手であるが、やはり年譜の上で重要な出来事である。

その第一巻十一号（昭和三十四年十一月号）には『豆人先生一周忌追悼号』というタイトルが付けられているが、「特集 豆人先生の思い出」欄があり、九人の同人がエッセイを寄せている。その中に、二つのエッセイに椿年と豆人との関係で注目すべき記述があった。一つは、椿年と同郷同年齢の前田岳人の「句碑になるまで」という記事である。これは、昭和二十九年（一九五四）五月二十三日に除幕式を行った足柄峠豆人句碑建立のいきさつを書いたものである。前年九月に行った足柄吟行の帰法子宅句会の時、豆人氏と椿年と岳人の三人が話し合って建立を決めたこと。除幕式の前々日五月二十一日に、碑石と諸道具に人夫、小野虹人と椿年・岳人三人の地元俳人がトラックに同乗して、足柄峠の建碑場所に向かったが折からの雨で、たどり着くだけでも困難を極めた話などが、詳細に記されている。また、西尾雲子という俳人の「虚脱の淵」という記事があり、その中に軍隊に応召されていた昭和二十年に、毎月送られてきた豆人師の俳誌『松籟』（当時『大富士』はその俳誌に統廃合されていた）が、それがどれだけ勇気づけられたかわからないという

こと。また、敗戦後の昭和二十二年夏、『大富士』二百号記念大会が発祥の地小山で開催されたことなどが記されている。これまで目にすることはなかったが、当然のことながら小山町在住の大富士同人元同人にも声が掛けられ、椿年の人柄からそれに参加し、戦後の豆人氏との再会となった出来事と推定できるのではないだろうか。ちなみに、椿年の『大富士』への復帰は、翌昭和二十三年（一九四八）五月の第十八巻第五号からであった。

『塔』第一巻十一号追悼号「水煙集 同人作品」（二〇頁）に寄せた椿年の句は、次の五句であった。

追憶

とろ、飯亡き師の記録十二碗

亡き師への追憶うすれ頼祭忌

ステッキにより来し友や頼祭忌

（『つばき句集』四〇頁 『句集 老稚』一八四頁）

子規の忌や小康を得て句座尻に

（『つばき句集』四〇頁 『句集 老稚』一八四頁）

糸瓜忌や師の記憶新たにす

（『塔』第一巻十一号 昭和三十四年十一月号 水煙集 同人作品 二〇頁）

この五句のうち第一句、第二句第三句第五句は豆人師の一周忌に合わせた追悼企画のための新作と考えられる。第一句は、他の椿年句の資料では見当たらず、この追憶のみでの投句であった。田園俳人という表現を差し上げている椿年は、農業の傍ら秋になると山に

入り自然薯を採って来ては、自作の野菜等と同様に、手土産に持参し人を喜ばせるのが好きだったと結び付いた俳人であった。この句は、おそらく古見豆人師が小山に尋常高等小学校校長として在任していた昭和四年四月～昭和十三年三月の間、湯山素鷗居で毎月豆人師の句会が開かれていたことが良く知られているが（宮川、二〇一七）、こうした句会の折に、椿年が山で採ってきた自然薯をとろろ飯にして振る舞ったことがあり、それを大層豆人師が気に入って、十二碗にも及んだことがあったのを、思い出の句として示したのである。

第二句から第五句の季語、^{だつさいき}瀬祭忌と糸瓜忌は、いずれも、明治三十五年（一九〇二）九月十九日に逝去した正岡子規の忌日、子規忌の別名で秋の季語となっている。第三句と第四句は、ともに『つばき句集』の最終頁（四〇頁）に記され、『句集 老稚』にも選句掲載されている。なお、『つばき句集』は和綴じの草稿本であるため、頁数は記載されていないが、分析のために最初の頁を一頁とし、最後の頁を四〇頁として記載することとした。第三句の瀬祭忌の日に「ステッキにより来し友」とは、誰をさしているのか定かではないが、豆人師と年齢が近い湯山素鷗と考えるとこの句の趣がより深いものとなってくるのではないだろうか。第四句は、『塔』第一卷第十一号『豆人先生一周忌追悼号』の前号、「塔俳句 小笠原龍人選」に子規の忌を糸瓜忌で置き換えて掲載されている句であるが、初出は『曲水』第十五卷第十二号（昭和五年十二月号）で、豆人師が小山市の成美尋常高等小学校に校長として着任した翌年の句であるので、更に思い出深い句の改作と考えられるのではないだろうか。

遅れ来て子規忌の月に端居かな

（『曲水』第十五卷第十二号 昭和五年十二月号 曲水句帖 水巴選 四四頁）

糸瓜忌や小康を得て句座尻に

（『塔』第一卷十号 昭和三十四年十月号 塔俳句 小笠原龍人選 一三頁）

糸瓜忌や小康を得て句座尻に

（『つばき句集』四〇頁 『句集 老稚』一八四頁）

このように並べてみると、『句集 老稚』の掲載句は、『つばき句集』『塔』第一卷十号いずれからかは、判然としない。『塔』第一卷十一号の句は、前号に載った。そのものでは面白みがないということから、「子規の忌」と置き換えたと考えるのが自然であろう。なお、この小康ということからその夏に椿年が一時何かの病気で療養した可能性を示す。

『つばき句集』に次の夏の退院の句があり、『句集 老稚』（一一〇頁）にも、「セルとなりて軽き名残に退院す」と加筆して掲載されている。

セルとなりてかるき名残に退院す （『つばき句集』二五頁）

ただ、このセルの句は作風からは昭和初期のようにも推定できるが、同じような自宅療養の句が『塔』第五卷第十号（昭和三十八年十月号）に掲載されている。

秋涼し

籐椅子に馴れ来て予後の日が沈む

全快の顔藤椅子に撮らせけり

『塔』第五卷第十号 昭和三十八年十月号 水煙集 同人
作品六頁）

椿年の末娘松本喜美子氏の記憶によると、「父は極めて丈夫な人で、病気でほとんど入院したことがない」という証言があり、それ程大病ではない病気または足の怪我で昭和五年頃、昭和三十四年、昭和三十八年の夏頃入院あるいは自宅療養をしたことがあったのかもしれない。ただし、豆人師が小山に在住時の子規忌の句会での思いの句と考えるならば、その入院退院は昭和五年少なくとも十四年までの夏で、その子規忌の句会は同年九月と推定するのが合理性がある。なぜならば、椿年の家族で存命している最年長は末子喜美子氏であり、昭和五年は三歳であったので、父親の短期間の入院のことが記憶になくても全く不思議はないからである。

『塔』第一卷第十一号には、他に「塔俳句 小笠原龍人選」に四句（二八頁）椿年の句が掲載されている他、「塔例会 各支部句会報（十月） 小山支部句会報（二〇・一一） 岳人居」（三八頁）という欄があり、その頃には前田岳人が句会の場所を提供するかたちで、塔小山支部句会ということが再編されていたことを窺わせる。ちなみに、椿年がその十月十一日の句会で吟じた句は、次の二句であることが記録されている。第二句は、『つばき句集』（三〇頁）にもそのまま選句記載されている。

鵲鳴くや霧霽れ上る括り桑
買い替えし老眼鏡や涼新た

『塔』第一卷第十一号 昭和昭和三十四年十一月号 塔例会 各支部句会報（十月） 小山支部句会報（二〇・一一）
岳人居 三八頁）

なお、この第二句はそのまま『塔』に投句され、次の第一卷第十二号「水煙集 同人作品」（五頁）に投句掲載されている。また、この句は『句集 老稚』（二九三頁）にも加筆して掲載されている。

買い替えし眼鏡ぴつたり涼新た 『句集 老稚』一五七頁

『塔』第一卷第十二号には、これもまた、いかにも椿年らしいといえる句が掲載されている。

雁来るや肥桶の肩替えて立つ

『塔』第一卷第十二号 昭和三十四年十二月号 塔俳句
小笠原龍人選 一一頁）

また、この句は前田岳人居で開催された塔支部 小山支部十一月句会で吟じられた句であることもわかる（同巻号三〇頁）。さらに、この句は『句集 老稚』（二九三頁）にも、選句掲載されている。

なお、この号には、伊東支部で豆人師の追悼句会が開催されたことが報じられている。「一如院富嶽豆人居十一周年忌追悼句会十一月十七日於晶人居 伊東支部（立早記）」

前号掲載の椿年のとろろ飯の句が、その追悼句会の報告にも引用

されているので、その一部をそのまま引用する。ただし、椿年はその追悼句会には出席していない。

「草水君が先生の古希祝賀俳句大会の時に撮った写真を引伸ばして壇上に安置。くさぐさの供物。何れも先生の好物である。嘗て句会にも出た事のある妙隆寺の上人を頼んでお経を上げて貰う。上人もお供物や頼んで置いたお位牌も持つて来て呉れる。お焼香も済んでから先生大好物のとろろ、飯が出る。椿年さんの句が思い出される。

とろろ、飯亡き師の記録十二碗 椿年

法要も済んで追悼句会に移る。」(『塔』第一卷第十二号 昭和三十四年十二月号三二―三三頁)

伊東市は、豆人師が尋常高等小学校の訓導あるいは校長として在職していた期間が長く、小学校の教え子であり、俳句の弟子でもあった俳誌『曲水』『大富士』の俳人を多く育てた地区でもあった。

なお、同号には、同年十一月二十二日に東京池上の池上曹禅寺で、豆人先生一周忌追悼俳句大会が開かれたことが報告されているが(三三―三五頁)、その句会の入選句として、椿年の二句が掲載されている。

豆人忌の廻吟に追われ蜜柑むく 椿年
ぬかづけば師の掛軸に忌の灯牙ゆ 同

(『塔』第一卷第十二号 昭和三十四年十二月号 三五頁)

翌年の『塔』第二卷第一号昭和三十五年一月号「水煙集 同人作品」には、正月号であるにも関わらず竿頭に椿年の喪の句が掲載さ

れている。これらの句は、おそらく豆人師のご葬儀の頃を吟じた句の可能性が否定できない。このうち、第三句は「塔例会 各支部句会報(十・十一・十二月)(六) 小山支部句会報」(二三頁)に、椿年が(十一月例会は前号で報告されており、また十二月例会はその次の号に報告されているので、推定して)第二回の十一月の小山支部の例会で、吟じた句として掲載されている。

落葉ふわと墓の茶碗に来て吸わる

香煙にまつわる風や落葉散る

喪主の足袋山の昴を踏み戻る

(『塔』第二卷第一号 昭和三十五年一月号 水煙集 同人作品 二頁)

なお、小山支部の十二月の句会で吟じられたもう一句は、『つばき句集』(二三頁)の作品で作句の年月日がはっきりしている一番最後のものと考えられる。『句集 老稚』(二五一頁)にも選句掲載されている句である。

温泉煙や青さ残して芒枯る

偶然に入手することができた俳誌『塔』の四冊目は、『塔』第二卷第二号である。この号の掲載句の中にも、亡くなった豆人師を偲ばせる石路の句が三句含まれている。豆人師の命日を花石路忌というが、その石路の花の句は「水煙集 同人作品」五句中二句、「塔俳句 小笠原龍人選」四句中二句が石路の句である。なお、第二句の末は^{すべ}は^{すべ}と読むべきであろう。

石路の花薄く黄の晝葉の上に
石路の雨つやつやと葉を沁る

『塔』第二巻第二号 昭和三十五年二月号 水煙集 同人
作品 六頁）

同じく、同号「塔俳句 小笠原龍人選」掲載四句中の二句

石路^{つわさき}や雨の庭隅昏れ残る

石路の花日射し一筋塀の穴

『塔』第二巻第二号 昭和三十五年二月号 塔俳句 小笠
原龍人選 一一頁）

この第二句は、『句集 老稚』に選句掲載されている。

石路の黄に一筋日ざし塀の穴 （『句集 老稚』二五五頁）

『つばき句集』の執筆時期と『句集 老稚』

『つばき句集』は、俳誌等への未発表作品が多く、作風や内容から十歳頃と推定される句や若い時の習作と考えられる素朴な句も少なくない。未発表あるいは俳誌については公的な図書館所蔵の欠巻欠号もあるが、現時点で収集可能な俳誌への掲載句の収集はほぼ調査完了といわざるをえない状況にある。数年に亘った資料収集作業であった。あとはおそらく、眠っているいずれかの人の個人所蔵の資料をどれだけ見つけられるかかなさそうである。現時点での作

業としては、三つの椿年句集収録の作品の俳誌等へ掲載状況を分析している。まずは、『つばき句集』の作品について、『句集 老稚』の選句掲載句との比較分析を試みとして行った結果を、表一として示す。

『つばき句集』には、重複記載二句を除き、二百七十八句が記載されている。『句集 老稚』は七百四十八句を掲載しているが、そのうち『つばき句集』に記載のある句は百六十六句であり、『つばき句集』の約五十八パーセントの句が、『句集 老稚』に収録されている。『句集 老稚』全体からすれば、約二十三パーセント占めるに過ぎないが、やはり『句集 老稚』を公刊する際に、この未発表句集は底本となったものの一つであろう。

『つばき句集』の作品を、もう少し詳しく分類してみると、新年の部三十六句、うち三句が『句集 老稚』に選句されている。『句集 老稚』の新年の部は、六十八句あるので、約三パーセントと意外に少ない。春の部では『つばき句集』六十八句のうち四十句五十九パーセントが『句集 老稚』に選句されている。『句集 老稚』の春の部は百六十二句であるので、約二十五パーセントである。『つばき句集』夏の部九十二句、うち五十四句が『句集 老稚』に選句され、約五十八パーセントを占めている。『句集 老稚』の夏の部は二百七十七句であるので、その約二十五パーセントが『つばき句集』の句である。

『つばき句集』秋の部六十七句、うち四十二句約六十一パーセントが『つばき句集』に選句されている。『句集 老稚』の秋の部は百八十二句あり、その約二十四パーセントを占める。ただし、『つばき句集』起源の夏の句はもう一句多く、逆に秋の部起源の句はもう一つ多い。それは、通常は、季語が異なれば別の句となるが、一

表1 『つばき句集』と『句集 老稚』・俳誌との対応

頁	句集句数		新年		春		夏		秋		冬		掲載俳誌等				
	つばき	老稚	つばき	老稚	つばき	老稚	つばき	老稚	つばき	老稚	つばき	老稚	曲水	大富士	塔	塔句集星苑	みづうみ
内表紙	1	1									1		1	1		3	1
1	7	6	7											1		*2	
2	7	2	7											1			
3	7	2	7											1			
4	7	4	7											1			
5	7	4	4														
6	7	4	2		3	3							1			*1	
7	7	4		1	5	3											
8	7	3			7	4											
9	7	2			7	3											
10	7	6			7	2					2		1	3		*1	1
11	7	5			7	5											
12	7	5			7	3											
13	7	4		1	5	2		2					1				
14	7	4			7	4		1					1				
15	7	5			7	2		0					1	1			
16	7	2	1		6	5		1					1	1			
17	7	4			4	1		4						1			1
18	7	4				7		4									
19	7	1				1		1									
20	7	3				4		3		3				1			
21	7	4				5		3			2						
22	7	3				7		7									
23	7	4				7		4					1				
24	7	4				5		3						1			
25	7	5				7		5						1			
26	7	5				7		4		2				2			
27	7	6				7		6						3			
28	7	7				7		7					1	3		1	
29	7	5				3		3						1			
30	7	2				1		1		6							
31	7	6				1		1		2				1			
32	7	3				5		3		6				1			
33	6	5								1							
34	7	5								2							
35	7	4								6				1			
36	7	4					1	0		7							
37	6	4								4			1				1
38	7	4					1	1		5							
39	7	2					4	1		3				2			
40	6	5					2	1		5					2		
合計	278	166	36	3	68	40	92	54	67	42	15	10	10	21	4	*7	4
老稚		748		68		162	217		182			119					

*うち1句は曲水、2句は大富士と重複

*1句は大富士と重複

*1句は大富士と重複

1句再出につき非加算

1句再出につき非加算

句だけ特殊な扱いの句が存在している。

大花野富士の夕影かふさり来 （『つばき句集』三十六頁）

大夏野夕焼けの富士かぶさり来 （『句集 老稚』百七十二頁）

の二句である。秋の季語花野を、夏の季語夏野に一文字置き換えて改作したと考えられるが、表ではごく単純に秋の句で『句集 老稚』に選句掲載となった句という意味で単純集計として秋の句のまま数値に移項させてある。勿論、『つばき句集』の句の改作とみなすかどうかの議論の余地は残されている。

『つばき句集』の冬の部は十五句と少ないが、そのうちの十句約六十七パーセントが『句集 老稚』に選句掲載されている。『句集 老稚』の冬の部は二一九句となり、その八パーセントを占めている。つまり、全体としては、『つばき句集』の収録句は『句集 老稚』の約四分の一程度を占めているに過ぎないので、『つばき句集』が単純な『句集 老稚』の底本とは考えにくいのではないかと考えられる。

次に、収録されている作品を俳誌掲載で分類してみると、一番多いのが『大富士』二十一句、次が昭和初期に豆人師の奨めで投句をした『曲水』十句、『塔』は四句、『みづうみ』四句となっている。『塔』と『みづうみ』の作品は、作句時期と投句時期がずれる場合や以前の作品の使い回しと考えられる例も珍しくないので、俳誌への掲載年月もあまり有力な手がかりとはいえない。先行する部分で論じたことから、『つばき句集』の選句執筆は豆人師の急逝と一周忌句会が大きな切っ掛けとなったのではないかと考えると、昭和

三十五年から昭和三十八年頃の時期と考えておく和理解しやすい。

列車の灯夜振りの水に落としゆく （『つばき句集』二七頁）

という句があるが、この句は『塔』第五巻九号（昭和三十八年九月号 塔俳句 小笠原龍人選 一一頁）に掲載されている。また、この句の改作と考えられる句が、同じ時期に『みづうみ』第二百八十四号（昭和三十八年九月号）に掲載されている。

列車の灯夜振りの水へ落としすぐ
（『みづうみ』第二百八十四号（昭和三十八年九月 濱人選 七頁）

これは、この時期の新作と考えるか、その少し前に未発表の句が多い『つばき句集』の草稿をまとめていて、そこから投句をしたかのいずれかであろう。『つばき句集』の句のうち俳誌『みづうみ』の掲載句は他に四句ある。また、いずれも昭和四十五年四月に刊行した『句集 老稚』の収録句であり、その原稿は前年の年末が限度とすると、第一句は昭和四十四年の正月以前の句でないといこの句集の発刊に間に合わない。

初空へ光り揃えて凍てこずえ

（『つばき句集』二頁 『句集 老稚』六頁）
（『みづうみ』三百六十号 昭和四十五年正月号 三十七頁）
括弧とけば陽炎ひろがれる

（『つばき句集』九頁 『句集 老稚』四〇頁）

『みづうみ』二百五十六号 昭和三十六年五月号 十二頁）
繭の蛾の羽震い強く明け易し

（『つばき句集』一七頁 『句集 老稚』八七頁）

（『みづうみ』三百五十五号 昭和四十四年八月号 二十二頁）

柿揺くや退けのボー鳴る工場町

（『つばき句集』三十六頁 『句集 老稚』二〇七頁）

（『みづうみ』三百三十二号 昭和四十一年十月号 一六頁）

第二句は『みづうみ』への掲載が昭和三十六年五月なので、まさにみづうみ俳句会の同人参加をした最初の号の投句であるので、その時点では俳誌への未発表句と考えておいた方が自然であろう。作句は前年昭和三十五年四月頃の新作、あるいはそれ以前の作であろう。第三句は椿年が養蚕をしていたのはいつ頃までだったかを確認

する必要があるが、仮に新作とするならば昭和四十四年の七月頃となり、『つばき句集』の執筆がそれ以降となり『句集 老稚』の編集の時期と重なる。それでは出版のための作業がかなり厳しいものとなるので、やはりそれ以前の未発表作品を急ぎ『みづうみ』に投句したと考えるのが自然であろう。少なくとも『つばき句集』は俳誌への未投稿作品を中心にまとめた句集と考えるべき側面をもって

いるので、少なくともかなり前の作品であつてもおかしくない。第四句は、作風と内容から、椿年自身が富士紡績の小山工場に勤めていた昭和初期、あるいは同社を退職した昭和七年十月以降の未発表先品の投句と考える方が自然であろう。

なお、前稿でもふれたことであるが、『句集 老稚』の掲載作品のうち一つの基盤となったものは、昭和四十三年九月に刊行された『塔創刊十周年記念合同句集 星苑』であると推定できる。これは、

俳誌『塔』の掲載句を回顧的に選句して編集投句が趣旨であつたと思われるが、椿年の句は五十句掲載されている。俳誌の性格が『大富士』の後継誌という趣旨もあり、発表誌は『塔』だけでなく（勿論、図書館の所蔵としてはまだ欠巻欠号が多い）、『大富士』や『曲水』に掲載された作品も少なくないが、掲載五十句中四十八句が『句集 老稚』に収録されている。『つばき句集』の句も七句、掲載されているが、これは逆にそれらの作品が昭和四十三年六月以前のものであることを示している。いずれにせよ、『つばき句集』が編集され始めたのは昭和三十五年から昭和四十四年の間に限定されるが、やはり中心的な作業は昭和三十五年から四十年頃までと考えておくとも無理がないように考えられる。

謝辞

本研究は、松本椿年翁のご子孫である松本喜美子・山崎京子・井上奈美江・松本典彦・松本時男の各氏による貴重な資料の閲覧許可とご証言が他の稿と同様、研究の基盤データとなっている。同じく、国立国会図書館・日本近代文学館・静岡県立中央図書館・俳句文学館・埼玉県立熊谷図書館・御殿場市立図書館の貴重な蔵書を利用していただいたことも記して感謝の意を表する。

引用文献

加納野梅編 昭和七年（一九三二）新草俳句集 野梅吟社（昭和七年十二月発行『新草』創刊号）昭和七年八月号より選句掲載）
前田岳人 昭和二十四年（一九四九）句碑になるまで『塔』第一巻第十一号 昭和三十四年十一月号 九一—一〇頁

- 前田弥一（岳人）昭和四十年（一九六五）自選 岳人句集 私家版
- 松本椿年 昭和九年（一九三四）各地句座 駿河小山あゆみ句會 大富士、第四卷第十一号、一九頁
- 松本椿年 昭和四十一年（一九六六）私の雅号『みづうみ』第三二三号 昭和四十一年二月号 二〇頁
- 松本傳次郎（椿年）昭和四十五年（一九七〇）句集 老稚 私家版
- 松本傳次郎（椿年）昭和五十七年（一九八二）第二句集 限界 私家版
- 版
- 宮川充司 二〇一六 田園俳人松本椿年の生涯と作品―生涯発達心理学の観点から略年譜の試作―椋山女学園大学研究論集 第四十七号 人文科学篇 四三―五九頁
- 宮川充司 二〇一七 田園俳人松本椿年の生涯と作品（二）―明治大正期から終戦頃までのライフイベントと作品―椋山女学園大学研究論集 第四十八号 人文科学篇 二三―四〇頁
- 宮川充司 二〇一八 田園俳人松本椿年の生涯と作品（三）―昭和初期から昭和四十年頃（高齢期）までのライフイベントと作品―椋山女学園大学研究論集 第四十九号 人文科学篇、二一―三六頁
- 宮川充司 二〇一九 田園俳人松本椿年の生涯と作品（四）―昭和四十年代（後期高齢期）のライフイベントと作品―椋山女学園大学研究論集 第五〇号 人文科学篇、一一―二〇頁
- 西尾雲子 昭和三十四年（一九五九）虚脱の淵『塔』第一卷第十一号 昭和三十四年十一月号 一一―一二頁
- 小笠原龍人編 昭和四十三年（一九六八）塔創刊十周年記念合同句集 星苑 塔俳句会
- 小笠原龍人 昭和四十九年（一九七四）句集 孤灯 塔俳句会
- 湯山逸素 昭和四十四年（一九六九）逸素句集 私家版